

語彙化の類型論と事象構造鑄型

でみず たかのり

出水 孝典

この論文は、移動事象の語彙化を、尺度に基づく事象構造鑄型を用いて説明するものである。初めに、タルミーによる有名な、衛星砕付け言語 vs 動詞砕付け言語という類型論的二分法ではなく、むしろ、動詞砕付け的語彙化は普遍的で、ほぼすべての言語で可能であるのに対して、衛星砕付け的語彙化は、衛星砕付け言語のみにある、追加的仕組みによって可能になっているという見方を取る方がよいと主張する。続いて、ベス・レヴィンとマルカ・ラパポート・ホヴァフによる事象構造鑄型を検討する。彼女らは近年、尺度のある変化・尺度のない変化という概念を用いて鑄型を特徴付けており、それを踏まえて、これら二種類の変化を、事象の同一認定という過程と組み合わせる。この過程は、彼女らが移動様態動詞と着点前置詞句の間に見られる意味的融合を説明するため提案したものである。さらに、組み合わせた結果を、タルミーの言う移動のマクロ事象という概念へと組み込む。最後に、主張を補強するために、小説からの実例とその翻訳を用いる。

全体をまとめると以下のような結論になる。(i) 動詞砕付け的表現の場合、マクロ事象の構成は統語構造へと同型的に写像される。一方、衛星砕付け的表現の場合、マクロ事象の構成要素は、統語的構成素と関連づけられはするが、同型的にはならない。これは、動詞砕付け的表現の方が、衛星砕付け的表現よりも基本的なものであることを示唆する。(ii) 基本的な動詞砕付け的語彙化の仕組みは、すべての言語に見られるが、衛星砕付け的な語彙化は、それとは異なり、追加的概念装置を必要とする。そのために、衛星砕付け的な語彙化が見られるのは、衛星砕付け的と分類されてきた言語に限られる。この概念装置がまさに、事象の同一認定である。事象の同一認定は尺度の付与であり、かつ、砕付け事象が従属事象に対して行使するとされる構造化機能の一事例であると見なすことができる。(iii) 事象の同一認定によって、砕付け事象は独立した意味要素としての資格を失い、従属事象に統合される。結果として、砕付け事象を統合した従属事象全体が、同型的に統語構造へと写像される。